

西行 長明 兼好

——草庵文学の系譜——

久保田 淳

明治書院

著者略歴

昭和8年，東京に生まれる。

昭和31年，東京大学文学部国文学科卒業。

専攻，中世日本文学

現在，東京大学文学部助教授。

著 書

「中世文学の世界」

「新古今歌人の研究」

「新古今和歌集全評釈」全9巻

「西行 山家集入門」

「日本人の美意識」等



国文学研究叢書



西行 長明 兼好——草庵文学の系譜——

定価 2,400円

昭和54年4月20日 印刷

昭和54年4月25日 発行

著 者 くぼ たじゅん 久保田淳

発行者 株式会社明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 精文堂印刷株式会社

代表者 西村弥満治

製本所 浦野製本



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16

郵便番号 101

電話 東京 (03)292-3741(代)

振替口座 東京3-4991番

©1979 Jun Kubota

3395-24921-8305

目次

草庵の文学

草庵の文学	7
隠者歌人——聴覚型と視覚型と——	18
旅と古典歌人——能因と西行にふれて——	32

西行

西行——人と生——	39
西行と草庵と歌と	60
西行の目	73
蝶の歌から	84

長 明

長 明 113

中世の随筆——方丈記と徒然草を軸として—— 121

無 名 抄 138

兼 好

徒 然 草 171

兼好における前衛性と後衛性 191

詩と散文の間 203

歌人としての兼好 217

徒然草の源泉——和歌—— 227

道を知れる人々 240

——徒然草第一七六—一八七段についてのノート——

中世の人と文体

文学に現れた中世的人物像 257

能 因——『袋草紙』を中心として 257

西 行——『西行物語』から見た 261

弁 慶——「御所桜堀川夜討」に現れた 266

北条政子——慈光寺本『承久記』における 270

中世の文体 275

方 丈 記 長 明 275

愚 管 抄 慈 円 279

平家物語 284

とはずがたり 後深草院二条 288

沙 石 集 無 住 292

徒 然 草 兼 好 296

神皇正統記 北畠親房 300

風姿花伝 世阿弥 304

中世和歌における伝統と創造（対談） 309

あとがき 329

草庵の文学

草庵の文学

一

王朝から中世へかけての日本人に、草庵への憧憬を抱かせ続けてきた一番の源泉は、白楽天の間適詩の世界、とくに「廬山草堂夜雨独宿寄^ニ生^ニ李^ニ七^ニ庚^ニ三^ニ十二^ニ員^ニ外^ニ」の詩に見える、

蘭省[、]花時錦帳[、]下 廬山[、]雨夜艸菴[、]中

の対句あたりであったように思われる。この句は『和漢朗詠集』山家に採られ、早くもその編者藤原公任等によって、

いかなるをりにか

草の庵をたれか尋ねむ

とのたまひければ、くら人たかたゞ

九重の花の都をおきながら

(前大納言公任卿集)

と連歌に翻案され、またそれを転用した清少納言をして名をなさしめ(枕草子、日本古典文学大系本八二段)、さらに、

さみだれに思ひこそやれいにしへの草の庵のよはのさびしき

(千載、一七七、三宮輔仁親王)

昔思ふ草の庵のよるの雨に涙なそへそ山ほととぎす

(新古今、二〇一、藤原俊成)

などの影響作を生んだ。人々はこの詩句から山ふところに抱かれた幽寂孤独な草庵を思い描き、世にありわびたおのが身を隠すべき理想郷として、それを憧憬したのであった。

では、白楽天が営んだ廬山の草堂は、具体的にはどんなものであったか。「草堂記」によれば、それは「三間兩柱、二室四牖」で、屋根は薨茸き、牆をめぐらし、石階を有するものであった。さらに室内を描写して、「堂中設^{ケタリ}木楊^ノ四、素屏^ニ、漆琴^一一張、儒道^ノ仏書各三兩卷^ヲ」という。簡素な小屋には違いないが、そのたたずまいは、わびしさ、さびしさとはむしろ反対に、閑雅な快適さを思わせるのである。そして、白楽天は、退官した後、妻子とともに来て住むことを、老後の生活設計としたのである。

侍^{ツテ}予^ニ異時^ニ、弟妹婚嫁^ヲ畢^リ、司馬歲秩滿^ニ、出処行止^ヲ、得^バ以^テ自遂^ニ、則必左手引^ニ妻子^ヲ、右手抱^ニ琴書^ヲ、

終^{ヘテ}老^コ於^ニ斯^ニ、以^テ成^{セン}就^ガ我^ニ平^ニ生^ノ之^志。清^ニ泉^ノ白^ニ石^ノ実^ニ聞^ク此^ノ言^ヲ。

これに近い草堂を営んだ日本人もいないわけではない。物語中の人物であるが、『源氏物語』の宇治十帖に登場する宇治八の宮は、自身の宇治の山荘を「草の庵」と呼んでいる。

われなくて草の庵は荒れぬともこのひとはかれじと思ふ

(椎本)

八の宮の場合は、北の方こそいなかったけれども、聖ならぬ俗聖として、二人の姫宮とともに住んでいたのであった。平安の最末から中世初頭にかけて、政治家であり、歌人、文人でもあった源(土御門)通親が、鳥羽の別業に草堂を創設して、これを白樂天が営んだ廬山の草堂に擬したこともある(擬香山模草堂記)。

しかしながら、「草庵」「草の庵」という語からわれわれが想像するたはずまいは、山荘、別墅^{べつしよ}などの有する閑雅なものではなく、もっとわびしく、あわれなものである。そして、その主も妻子を伴った優婆塞であるよりは、孤独な聖である方がふさわしいと思う。それは、われわれにとって、草庵に住み、草庵の心を吐露し続けた文学者として、直ちに西行、長明らが想起されるからに違いない。

二

西行を出家に踏み切らせた原因は不明であるが、草庵生活への憧憬が強く働いていたことは、自身

書き留めていることから十分に想像される。出家以前の彼は東山の阿弥陀房や嵯峨の法輪に住む空仁などの庵室を訪れて、強く心惹かれたのであった。東山では、

しばのいほときくはくやしきななれどもよにこのもしきすまひなりけり (山家集、七二五)

と歌っている。そして、二十三歳の秋、世を背いた。

憧憬していた草庵の生活に入ることによって、彼の心は安らぎを得たであろうか。いな、鞍馬に籠った出家当初の彼が得たものは、身を刺すようなさびしさであった。

よをのがれてくらまのおくに侍りけるに、かけ

ひこほりて、水まうでござりけり、はるになる

までかく侍るなりと申しけるをきゝてよめる

わりなしやこほるかけひの水ゆゑにおもひすててしはるのまたるゝ (同、五七一)

思い捨てたはずの浮世の春が心待ちされる——それは世を通れるという行為とは背馳する心である。

そういう己の心を「わりなしや」(道理が立たないよ、わけがわからないな)と反省する。反省はしても「おもひすててしはるのまたるゝ」ことには変わりはないであったであろう。

以後、彼は率直に草庵生活のさびしさ、人恋しさを訴え、それを癒やすべき友を自然物に見出そうとする。

はるのほどはわがすむいほのともに成りてふるすないでそ谷の鶯

(同、三〇)

いほにもる月の影こそさびしけれやまだはひたの音ばかりして

(同、三〇三)

かきこめしすそののすゝきしもがれてさびしさまるしばのいほ哉

(同、五〇五)

はなもかれもみちもちらぬ山ざとはさびしさをまたとふ人もがな

(同、五五七)

ひとりすむかた山かげのともなれやあらしにはるゝ冬の夜の月

(同、五五八)

たにのまにひとりぞまつも立てりけるわれのみとはなきかとおもへば

(同、九四一)

みづの音はさびしきいほのともなれやみねのあらしのたえまゝに

(同、九四四)

また、自然を相手にしてひとり興じてみたりする。

高野にこもりたりけるころ、草のいほりに花の

ちりつまければ

ちる花のいほりのうへをふくならばかせいるまじくめぐりかこはむ

(同、一三八)

雪にいほりうつみて、せんかたなくおもしろかりけり。

「いまもきたらば」とよみけんことおもひいでて見けるほどに、しかのわけてとほり

けるを見て

けるを見て

人こばとおもひて雪を見る程にしかあつくももありけり

(同、五三三)

「ちる花の」の歌は、

大空に覆ふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ

(後撰、六四、読人不知)

という古歌と発想を同じくする、稚氣を感じさせるものではあるが、しかしその他愛なさの背後に、われわれは、ふだん風に吹きさらされている、「めぐり」（垣根）もない裸の草庵を見ないわけにはいかない。「人こぼと」の歌は詞書が作者の心をみごとに語っている例である。草庵を埋め尽くすほどの雪は、西行に「せんかたな」いまでのおもしろさを覚えさせる。彼はこのおもしろさを分かちあう人がいたら、と思う。しかし、草庵には彼一人しかない。誰かがこの雪を踏み分けてやって来ないかぎり、このおもしろさは分かちあえないのである。誰か来ないかと思った時、彼は和泉式部の、

待つ人のいまも来たらばいかがせむ踏ままく惜しき庭の雪かな

（詞花、一五六）

という歌を想起する。その折も折、人ならぬ鹿が雪に足跡をつけて通ったのである。あたかも、鹿が西行の心理を読み取ったように。おもしろさは相乗された。それが「人こぼと」の歌となって定着したには違いない。が、そのおもしろさは、彼が孤独で鹿以外の誰にも訪われないというさびしさの極限において、初めて得られたものである。だから、そのおもしろさを表現化した「人こぼと」の歌は、同時にさびしさの確認でもあるのだ。

もとより、西行には草庵生活者としての自負、自信があった。

山深くさこそ心は通ふとも住まであれを知らむものかは

（新古今、一六三〇）

山かげに住まぬ心はいかなれや惜しまれて入る月もある世に

（同、一六三一）

というのは、強がりではないであろう。よし、そこに勸進聖的な説教調を感じる向きがあるとしても、

こういう強い調子の物言いが、彼の草庵生活の現実体験に裏打ちされていることは確かである。が、その彼においても、かつては憧憬の対象であった草庵生活は、捨てたはずの俗世間へともすれば引き戻されそうになる心と、勇猛果敢に修行に精進しようとする心との、葛藤の場であったのだ。右の二首を収めている『新古今集』の雑中が、その少し先に、同じく西行の、

山里にうき世いとはむ友もがなくやしく過ぎし昔語らむ

(一六五七)

山里は人來させじと思はねどとはるることぞ疎くなりゆく

(一六五八)

の二首を掲げていることは、印象的である。鶯も、松も、月の光や水の音も、ついに「くやしく過ぎし昔」を語り合うに足る友ではなかった。人なつかしさ、浮世への断ち難い思いにとらわれた時、彼の心は夢の裡をさまよい歩く夢遊病者のようだったであろう。その時、一陣の山風が吹きつけて、迷夢を吹き散らし、はっと山林修行者の心に立ち帰らせる。

やましの心の夢にまどひをれば吹きしらまかす風の音哉

(山家集、一五四九)

『山家集』は、西行のそのような「山里の心の夢」との苦闘の所産である。

三

長明にとって、西行は当然意識せざるをえない存在であったであろう。王朝末のベテラン歌人俊恵

に師事した長明が、歌人としての西行の偉大さをどこまで理解できたかは、実の所はつきりしないのであるが、『長明無名抄』の中に、歌人西行への鑽仰の字句を見出すことはできない、出家以前の長明は伊勢に旅をした時、西行の住んでいた安養山を訪れている。西行の生き方は長明にも強い印象を与えていたに違いない。

しかしながら、長明の出家に際しては、西行の場合のような草庵生活への憧憬はほとんど抱けなかったのではないか。その出家は、たとえそれだけが決定的な原因ではないとしても、後に「社司を望みけるが、叶はざりければ、世を恨みて」（十訓抄）の行為と説明されてもしかたのないものであった。そして、年齢も五十ほどであったと考えられる。既に人生を見極めてよい年である。

長明は己が人生を見極め、見切りをつけたのだ。彼は『方丈記』で「ヲノヅカラミヤコニイデ、身ノ乞丐（こつがい）トナレル事ヲハツ」という。彼は自らを人生における敗残者と規定するのである。西行にも出家者であることへの自負とともに、そのことのもたらす劣等感が皆無だったとはいえない。が、長明の劣等感は強烈である。

しかしながら、長明はその負い目を逆手に取るのである。負を転じて正にしようとするのである。右に引いた『方丈記』の文章は、次のように展開している。

ヲノヅカラミヤコニイデ、身ノ乞丐トナレル事ヲハツトイヘドモ、カヘリテコ、ニナル時ハ、他ノ俗塵ニハスル事ヲアハレム。若人、コノイヘル事ヲウタガハ、魚ト鳥トノアリサマヲ見ヨ。